



教職員のコミュニケーションが 学生一人ひとりの成長をうながす 金城学院大学を形成していく

「21世紀が求める大学」の形成を目指し、学長のリーダーシップを強化するために、今年度より金城学院大学に副学長という役職が設置されました。

初代副学長に就任された二杉孝司教授に、どんな役割を担っていくのか、金城学院大学はどう変化していくべきなのかなどについてお話を伺いました。



金城学院大学

二杉孝司 副学長

- 文学部言語文化学科教授
- 専門分野／教育学
- 研究課題／授業研究、教育ディベート
- 所属学会／日本教育方法学会
日本カリキュラム学会
教育技術学会
日本教師教育学会

学内コミュニケーションの 仲介役に

大学に対する社会の期待が多様化したからでしょうか、大学運営という仕事が一段と難しくなってきました。そこで、金城学院大学はこの4月から新たに副学長という役職の導入を決めました。これまでも、学長を補佐する役職としては2名の学長補佐がいましたが、学長室の機能をさらに強化することが目的です。いろいろと不安なことばかりですが、大事な仕事で

すから一所懸命に努めたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

副学長の仕事は学長を補佐することに尽きますので、個人的に特別な抱負があるわけではありません。私としては、学長と教員とを繋ぐような役割を担えればよいと思っています。学長の考えを教員に伝え、教員の考えを学長に報告する役目です。まだ構想中なのですが、週に2人の教員とゆっくりと話す時間を持ちたいと思っています。そうすれば、月に8人として、

2年ですべての教員と直接意見を交わすことができます。

大学の中にはさまざまな組織があり、多くの委員会があります。それぞれの持ち場で努力をしていますが、大学の組織は大きいので、ともするとお互いに何をしているのかが分からなくなります。まるで「縦割り行政」みたいになってしまうのです。ですから、学長と教員の橋渡しだけではなく、委員会と委員会を相互に結びつけるような役割が果たせればよいですね。教職員のコミュ

ニケーションが高まれば、大学の教育力ははるかに高いものになるはずです。

✠ 学生の成長をうながす大学へ

副学長になり、学長からは、学長の全般的な補佐と、大学の将来構想作りの中心となることを指示されました。これが、なかなか難しいのです。

いま日本の大学は、大きな変化を求められています。大学のユニバーサル化と言われているのですが、大学進学率が50%を超え、一人ひとりの学生の大学に求めるものが違ってきたからです。

私が学生だった40年前は、どちらかというと先生には放っておいてもらいたい、という学生気質だったと思います。今、アドバイザーとして学生と面談をしています。将来のことや困っていることなど、学生はよく話してくれます。留学や進路や学業のことなどいろいろと相談にのると感謝されますから、こちらもうれしくなるのですが、それだけきめ細かな指導が期待されているということなのでしょう。

さいわい本学は、ゼミなどを中心に少人数の授業を数多く設定していますし、担任やアドバイザーとしての学生との交流を重視していますから、恵まれた環境にあるといってよいでしょう。

大学の規模もちょうどよいのかもしれない。自分がまったく知らなかったような学問分野と「偶然に会う」ことが大学の魅力の一つですから、大学にある程度の規模は必要だと思います。しかし、あまりに巨大化し、教職員同士でもお互いに顔と名前が分からないということになると、学生とのコミュニケーションもなかなか難しくなると思います。

もちろん、教員は学生と仲良くなるのが仕事ではありません。一人ひとりの学生を成長させるのが仕事ですから、授業や個別指

導を通して学生を厳しく鍛えていくことが大切です。最近、若者のマナーが問題になっていますが、そういう指導も強化し、ルールを守ることはもちろん、洗練された所作とでもいいますか、言葉遣いを含めた美しいマナーを身に付けて卒業してほしいですね。

そう、大学教育の真価は卒業後に表れるものだと思います。卒業後は自分一人で学び続けなければなりませんから。大学時代は教員が手取り足取り教えることもできますが、その過程で学ぶ意欲と方法を学生に身に付けさせることが、教員の役割だと思います。

✠ 強く、優しい金城学院大学生に

将来のことを考えると、過去に目が向きます。私は最近よく、金城学院の歴史と伝統について考えます。明治22年（1889年）の創立ですので、もうすぐ120周年を迎え、卒業生は約8万人を数えます。

2年前に、「強く、優しく。」を本学の教育スローガンに決めました。しかし、振り返って考えてみると、金城学院の卒業生約8万人の歩みがこのスローガンを体現してきたように思います。いろいろなところで卒業生に出会い、卒業生を知っている方に出会いますが、そういったときに歴史と伝統の有難さを強く感じます。金城学院大学に好感を持ってくださる方が大勢いらっしゃると思いますが、これは本当に卒業生の皆さんのおかげですね。学生たちには、そういう学院の歴史に連なっていくのだという思いを持ってほしいです。

実は、私は「優しさ」という言葉には危うさがあると思っています。たとえば、相手を傷つけてしまうのではないかという配慮から、あるいは自分が傷つくのが嫌



だから、言うべきときにきちんと言わないということがあります。そういうときに、弱い自分を「優しい」と錯覚するように思うのです。

単なる「優しさ」ではなく、「強く、優しい」ところにこのスローガンの価値があると私は思っています。強い自分があるから、自分にも相手にも優しくなれるのです。そういう意味で、学生たちには、強く優しくなってほしいのです。

私たちの課題は、そういう学生を育てるためのカリキュラムや指導体制を作っていくことです。そういう意味では「将来構想」といっても特別なことではなく、目の前の学生がより成長するために、大学に何ができるのかを考え続けることだけのようにも思えます。

どんな小さなことでも構いません。注意すべきこと、お気づきのことがあれば、教えていただきますよう、皆様にはお願いいたします。できることは、すぐにやりますから。



金城学院長・金城学院大学長
柏木哲夫 先生

戸田安士学院長の任期満了に伴い、今年度より柏木哲夫先生が学院長に就任されました。今後は、学院長と大学長を兼任され広く学院の運営にあたります。戸田安士先生は、引き続き理事長として学院の運営に力を注がれます。副学長の新たな力も得て、よりアクティブな大学の動きが期待されます。